

ウィリアム・テンブルとドロシー・オズボーン

岸本 広司

本稿は、外交官・著述家・造園家として有名なサー・ウィリアム・テンブルの政治思想研究の一環として、彼の人間形成や思想形成に少なからぬ影響を及ぼしたドロシー・オズボーンに着目し、テンブルとドロシーが知り合った経緯、英文学史における書簡文学の成立とも言われるドロシーのテンブル宛書簡が書かれるまでの消息等を、当時の政治的・社会的背景を踏まえながら伝記的に考察した。

Keywords：ウィリアム・テンブル，ドロシー・オズボーン，内乱，ドロシーの書簡

1. はじめに

サー・ウィリアム・テンブル (Sir William Temple, 1628-99) は20歳のときにグランド・ツアーに出たが¹⁾、出立した1648年前後のイングランドは混乱の極みにあった。改めて言うまでもなく、46年に国王軍が議会軍に降伏して第一次内乱は終結したものの、その後は議会派内部で、以前から顕在化していた長老派 (Presbyterians) と独立派 (Independents) の対立が激しくなっていた。そしてやがて軍隊に強固な支持基盤をもつ独立派が主導権を握るところとなった。しかし軍隊内部でも軍幹部と一般兵士を中心とする水平派 (Levellers) が対立し、そのため反国王派は複雑な様相を呈していた。こうした状況のなかで、国王派と長老派が軍内部の抗争に乗じて策動を始め、48年4月についに第二次内乱が始まった。この内乱は、独立派と水平派の対立回避もあって同年8月に議会派の勝利で終わっている。だがそれが終結するや、議会派のなかで内紛が再び激化した。長老派の方は、47年11月からワイト島で逃亡生活を送っている国王に接触、和平の可能性を探り、48年9月にワイト島ニューポートでいわゆる「ニューポート交渉」(Newport Treaty) が行われた。しかし国王は長老派と独立派の対立を利用しようとして曖昧な態度に終始し、そのため国王への不信感が募ることになった。他方、軍幹部は「軍の抗議」(Remonstrance of the Army) を発表、内戦の責任者として国王の処刑を公然と要求するようになった。そして12月には、プライド大佐率いる部隊が

約140名の長老派議員を議会から追放するという事件が起きた。いわゆる「プライドの追放」(Pride's Purge) である。このパージによって、議会は「ランプ (残部) 議会」(Rump Parliament) と称せられるように、わずか60名あまりの独立派議員で構成されることとなった。そして事態は、翌49年1月の国王裁判および処刑へと進んでいくことになるのである。

さて、テンブルが旅立ったのはまさにこのようなときである。「イングランドにとってあまりにも悲惨な時代であったので、国内に混乱をもたらした張本人以外、この国を離れるのに何の悲しみも感じなかった²⁾」とまで言われるほどであった。テンブルがこの内乱をどのように見ていたかは別な機会に論じるとして、フランスに向かったテンブルは海峡を渡る前にまずワイト島 (the Isle of Wight) に立ち寄っている。ワイト島は、イングランドからソレント海峡を挟んだ南方に位置し、対岸はハンブシャー州、島の南部はイギリス海峡に面する島である。テンブルがここに立ち寄ったのは、義理の伯父、つまり母親の姉の夫であるサー・ジョン・ディングリに会うためであった。ディングリは古い家柄の出で、この地に広大な土地を所有していた。彼には9人の子どもがいたが、長男の土地管理が良くなかったため、やがて家産が傾くことになる³⁾。

ワイト島には、実は別な親戚の者もいた。母方の従兄弟のロバート・ハモンドである。彼は議会軍の将校で、歩兵連隊長およびエクセターとグロスター

の司令官を務めたあと、ワイト島の総督として1647年から同島に駐在していた。ロバート・ハモンドが歴史に名を残すことになったのは、国王の監禁という困難な任務を担ったことによる。すなわち、チャールズ1世は47年11月にハンプトン・コートを離れてワイト島に逃れたが、拘束されてカリスブルック城 (Carisbrooke Castle) に幽閉されることになった。その際、議会によって王の監禁を命じられたのがこのハモンド大佐であったのである⁽⁴⁾。テンブルはワイト島滞在中にハモンドを訪ねたに違いない。また、G・C・ムーア・スミスも言うように、幽閉中の国王に拝謁したことがあったかもしれない⁽⁵⁾。

ワイト島は、テンブルにとって忘れえぬ地となった。のちに彼の妻となるドロシー・オズボーン (Dorothy Osborne, 1627-95) とはじめて会ったのがこの地であったのである。テンブルと同様、ドロシーも兄のロバートとフランスに向けて旅の途中であった。ガーンジー島 (the Island of Guernsey) の副総督で、当時フランス北西部のサン・マロ (St Malo) にいた父親のサー・ピーター・オズボーンに会いに行くためこの島に一時滞在していたのである。このときドロシー21歳、テンブルより1つ年上であった。オズボーン家はジェントリ階層に属し、内乱前はベドフォードシャーのチックサンズ (Chicksands) に所領があった。しかし、サー・ピーターが王に忠誠を誓う国王派の人間であったため、内乱の進行とともに財産の多くが失われた。そしてやがて一家は困窮するようになる。われわれは、テンブルとドロシーが知り合った経緯を考察しようと思うが、そのためにはまずオズボーン家から見ていく必要がある。

2. オズボーン家

さて、ドロシーの父親のサー・ピーター・オズボーンは、ガーンジー島の副総督のほかには財務府大蔵卿付き収入管理官 (Treasurer's Remembrancer of the Exchequer) のポストを保有していた。これは、国王の経常収入と国王に支払われるべき債務や罰金の徴収を担当する官職で、彼の祖父、つまりドロシーの曾祖父から祖父を経て相続したものであった⁽⁶⁾。また、ロンドンから約40マイル北に位置するチックサンズの屋敷と年収約4000ポンドの広大な地所も受け継いでいた⁽⁷⁾。父親のサー・ピーターは5人兄弟の長男で、1番下の弟がベストセラーとなった『息子への助言』 (*Advice to a Son*, Part I, 1656; Part II, 1658) を書いたフランシスである。一家の政治的立場は複雑で、ピーターが不屈の国王派であったのに対してフランシスは議会派であった。一族の者

が政治的に相反する立場をとった事例はハモンド家 (テンブルの母親の実家) に見たとおりであるが⁽⁸⁾、同様のケースはオズボーン家にもあったのである。

他方、ドロシーと同名の母親はサー・ジョン・ダンヴァーズの末娘で、彼女には3人の兄がいた。ドロシーの1番上の伯父であるサー・チャールズ・ダンヴァーズは軍人で、勇敢な人物であった。ネーデルラントでの戦功が認められて、20歳という若さでナイト爵に叙されている。しかし弟ヘンリの犯した殺人事件に巻き込まれ、ヘンリとともに法外者としてフランスに逃亡せざるをえなくなった。その後許されて帰国するが、やがてエセックス伯ロバート・デヴルーの謀反に加担したかどで逮捕され、大逆罪で1601年に処刑されている⁽⁹⁾。

2番目の伯父のサー・ヘンリ・ダンヴァーズも早くから軍隊に入り、軍の指揮官として勇猛ぶりを発揮した。1591年のルーアン包囲の際の顕著な働きにより、19歳にしてナイト爵位を授けられている。しかし前述のように、殺人事件を犯して兄と一緒にフランスへ亡命した。「殺人者」という汚名は終生付きまとったものの、帰国後は軍で活躍、軍功によりジェームズ1世から男爵位を、1626年にはチャールズ1世からダンビ伯爵位を授けられている。またガーンジー島の総督にも任命されている。だが彼にとってこのポストは魅力的ではなく、むしろ自らの名声を損ない不利益をもたらすもののように思われた。そこで内乱が差し迫ってきたとき、危険を察知した彼はこのポストを義理の弟すなわちドロシーの父親であるサー・ピーター・オズボーンに譲った。これが、オズボーン家に不幸をもたらす原因となったことはのちほど見るとおりである。なお、ダンビ伯は11,000ポンドの年収を誇る大土地所有者であった。彼はその一部をオクスフォード大学に寄付し、1621年に「オクスフォード植物園」 (Oxford Botanic Gardens) を創設している。現存するイギリス最古の植物園である⁽¹⁰⁾。

3人目の伯父のサー・ジョン・ダンヴァーズは議会派に属し、国王の処刑に署名した人物として、また庭園愛好家として有名である。彼は「弑逆者」 (regicide) ということから、兄ヘンリの「殺人者」以上に血なまぐさいイメージで見られてきたが、ここでは庭園に関してのみ言及しておこう。サー・ジョン・ダンヴァーズは、チェルシーにイタリア・ルネッサンス様式の庭園を造営した。それは庭と邸宅を1つの統合体として設計したもので、石段・彫像・噴水・人工洞窟などを備えた立体的で眺望的なテラス式庭園であった。ジョン・オーブリーによれば、「彼はわれわれにイタリア風庭園様式をはじめ教えてくれ

た。彼はフランスとイタリアを旅行し、優れた観察を行った。健全な肉体の持ち主で、それにふさわしい健全な精神を有している。……非常に洗練された想像力を持ち、それを主として庭園や建築に生かしている⁽¹¹⁾。サー・ジョンと親しいフランシス・ベーコンもチェルシーの庭園をたいへん気に入り、ダンヴァーズ・ハウスをよく訪問した。「全能の神は初めに庭園を造った。実際それは、人間の喜びのなかで最も純粋なものである⁽¹²⁾」という書き出しで始まる「庭園について」(“Of Gardens,” 1625)と題されたベーコンのエッセイも、このチェルシー庭園と決して無関係ではないであろう。彼がこのエッセイで「王侯にふさわしい庭園」(princely garden)として理念的に描いた理想の庭は、壮麗な建物と調和した秩序の空間であり、チェルシー庭園と同様、イタリア・ルネサンス様式の流れを汲む整形形式庭園(formal garden)であった。ドロシーはこのサー・ジョン伯父を好いていた。少女時代に「素敵な伯父⁽¹³⁾」の館でしばらく過ごしている。おそらくテンブルも、ドロシーからチェルシー庭園のことを幾度となく聞いたことであろう。テンブル自身はこの庭園について何も書き残していない。しかしサー・ジョン以上に庭園趣味とその理論をもち、造園に精力を傾けたテンブルである。彼が好んだのは整形形式でなかったとはいえ、造庭に際してこの有名なチェルシー庭園を意識しなかったとは考え難い。むしろ、この庭園に直接的・間接的に何らかの影響を受けたと考えるのが自然であろう。われわれは、別稿でテンブルの庭園論を取り上げる際にこの点に立ち返りたい。

3. ドロシー

さて、ドロシー・オズボーンはサー・ピーター・オズボーンとドロシー・オズボーンの末子として1627年に誕生した。上には9人の兄姉がいたが、彼女が生まれたときすでに2人の兄は夭折しており、実質的には8人兄姉であった。ドロシーの受けた教育について彼女自身は何も語っていない。しかし、洗練された文体と豊かな表現力で書かれた彼女の手紙を見ればわかるように、高い知性、鋭い感性、強い意志力をもち、かつまた茶目っ気あるウィットを兼ね備えた女性であった。しかもオヴィディウスなどの古典を好み、フランス語に堪能で、当時のフランスの小説を愛読していた。高い教養をもった女性であったことがよくわかる。

すでに述べたように、ドロシーの父親のサー・ピーター・オズボーンはチックサンズに年収約4000ポンドもの広大な土地を所有していた。だが1642年の内乱勃発とともにオズボーン家は没落の道をた

どった。同年8月に、国王チャールズ1世がノッティンガム城に国王旗を掲げたとき、忠誠心篤い老郷紳であるサー・ピーターは王のために多くの財産を拠出している⁽¹⁴⁾。そして息子たちも国王派の軍人として参戦している。しかし、議会軍との戦闘で2人の息子が31歳と26歳の若さで戦死した。戦況が国王軍に不利な形で進むにつれて、オズボーン家の財産の多くが議会派に差し押さえられ、ドロシーによれば年収400ポンドにまで激減している⁽¹⁵⁾。

父のサー・ピーターは、ガーンジー島の副総督として1643年からコーネット城(Castle Cornet)の防衛に当たった。ガーンジー島は、イギリス海峡のチャンネル諸島の北西部に位置し、1066年のノルマン・コンクエスト以来、歴代王室の直轄地であった。フランス海岸近くに位置するがゆえに、通商的にも軍事的にも重要な島と見なされていた。三方を海に囲まれた崖の上に立つコーネット城は、文字どおり国王派の難攻不落の要塞であった⁽¹⁶⁾。だが島の住民の多くはチャールズ1世に反対して議会支持を表明、そのためサー・ピーターと配下の兵士は議会派に包囲され、長期にわたって籠城することになった。議会派はしばしば寛大な条件で降伏を勧告したが、サー・ピーターはそれを拒否して国王への忠誠を貫き通した⁽¹⁷⁾。議会派の攻勢に不屈の意志で耐え抜きながらも、病気と飢えに苦しめられたサー・ピーターは、味方に何度も援軍と食糧援助を要請している。だが何の応援もなかった。食糧はやがて週に1人当たりビスケット4枚という状態にまで陥ったという⁽¹⁸⁾。サー・ピーターの家族も彼を助けるために全力を尽くした。財産が底をつく、妻は衣服や先祖伝来の金銀の食器類を売却したり、多額の借金をしたりして夫に糧食を送った⁽¹⁹⁾。また、政界の有力者たちに手紙を書いて支援を求めた。しかし、度重なる心労から彼女の身体は衰えていった。チックサンズの家は議会派によって占拠され、そのため家族は放り出されて親戚を渡り歩く状態にまで零落している。

1646年の夏に、サー・ピーターは国王からコーネット城を退去するよう命じられた。4年あまりの籠城であった。しかし、解放されてもイングランドへ戻ることはできなかった。国土の大部分が議会派の支配するところとなり、帰郷しても必ずしも安全ではなかったからである。そこで彼は、ガーンジー島の南に位置し、フランス北西部の港町であるサン・マロへ行くことにした⁽²⁰⁾。だがサン・マロへ行ったものの、61歳になったサー・ピーターの身体は衰弱していた。財産は差し押さえられ、2人の息子も戦死していた。将来への明るい希望はまったくなか

った。強いて言えば、末娘のドロシーが良縁を得て名家と姻戚関係を結び、それによって一家の再興がなされることだけが夢と言えれば夢であったのである²⁴⁾。

さて、ドロシーがサン・マロにいる父親に会うために旅行に出たのは、オズボーン家がかつてないほどの悲惨な境遇にあったまさしくこのようなときであった。彼女に付き添ったのは、1つ違いの兄ロバートであった。当時の旅行は危険と隣り合わせであった。道路はわだち、穴ぼこ、石ころだらけで、馬車の揺れ方は甚だしく、御者が手綱さばきを誤ると横転したり、雨に見舞われると道路が泥沼化して、道の真ん中で立ち往生したりすることしばしばであった。追い剥ぎに襲われたり、悪質な御者に引っ掛かったり、海路では海賊に襲撃されたりすることもあった。当時の船は風任せで、風向き次第では目的地にたどり着けないこともあった。また旅の途中で病気や怪我をしても、医者に診てもらうことはおろか、わずかな薬さえないこともあり、旅行中に命を落とすことすらあった。こうして、当時の旅行は危険に満ちていた。とりわけ女性にとって危険この上なかった²⁵⁾。

当時、若い紳士の外国旅行は教育上重要な意味があると考えられた。他方、上流階級の若い未婚の女性にはそのような自由はおおよそ認められなかった。そしてそれ以上に認められなかったのは、旅先で親の許可なく若い男女が密会し、結婚の約束をすることであった。それは家庭、ひいては社会に無秩序をもたらすものと考えられたからである。こうした社会的状況のなかで、ドロシーは兄とともにサン・マロに向けて出立した。そしてワイト島に渡り、フランス行きの船便を待っていたが、実はテンブルもグランド・ツアーに行く途中、親戚に会うためにこの島に逗留していたのであった。かくして、テンブルとドロシーの運命的な出会いとなる。

前述したように、国王チャールズ1世は47年11月にハンプトン・コートを離れてワイト島に逃れたものの、同島の総督でテンブルの従兄弟であるハモンド大佐に拘束されてカリスブルック城に幽閉されていた。熱烈な国王派の人間からすれば、国王を幽閉するという大それた行為はとうてい許されるものではなかった。ドロシーの兄のロバートも同様であった。彼は血気あふれるいささか向こう見ずな若者であった。テンブルの妹のジファード夫人によれば、サン・マロに向けて出発する日の朝、ロバートは宿屋の窓ガラスに怒りのあまりダイヤの指輪でこう落書きした。「そこでハマンは、モルデカイのために準備していた絞首台で処刑された」(And Hamman was hang'd upon the Gallows he had prepar'd for

Mordecai) と²⁶⁾。ペルシャの大臣ハマンはユダヤ人を迫害したため処刑されたという旧約聖書「エステル記」から引用されたこの一節は、王を監禁しているハモンド大佐のみならず、それを命じたクロムウェルを痛烈に当てこすったものである。この落書きはすぐに見つかった。そしてロバートはドロシーとともに総督のもとに連行された。だが総督の尋問が始まったとき、ドロシーが進み出て自分がやったことだと申し立てた。女子ならば、こうした政治的悪戯も大目に見られるであろうと考えたのである。ドロシーの機転のおかげでロバートは救われた。一行は赦免され、旅を続けることが許されたのであった²⁷⁾。

このときテンブルは、すでにドロシーと知り合いになっていたようである。そしてハモンド大佐も、従兄弟のテンブルに配慮してドロシーを追及するのを控えたのではないかと思われる。だがそれはともかくとして、テンブルはドロシーの賢明で勇敢な行為に強い感銘を受けた。ドロシーの方もやがてテンブルに心惹かれるようになる。ジファード夫人が言うように、このときから七年あまり続く有名な恋愛が始まることになるのである²⁸⁾。

4. 恋愛と別れ

さて、ドロシーに思いを寄せるようになったテンブルは、彼女たちとサン・マロに向けて船旅を共にした。一緒に旅をするなかで、互いに惹かれ合っていく様子をデイヴィッド・セシルは次のように書いている。

「このときすでに2人は既知の仲だった。ロマンチックな照明を浴びたドロシーの姿に心を動かされて、テンブルは急いでその関係を深めようと思った。彼にとってそれが難しいことだったはずはない。テンブルのすらりとした容姿は立派だったし、美しい巻毛を肩にたらし、眼は黒く、澆刺とした顔は自信にあふれ知性に輝いていて、その風姿全体が人に好印象を与えずにはいなかった。それに口を開けばたちまち人を飽かせぬ話し手となり、才知と想像と大胆な面白い思いつきがほとぼり出るのだった。言うまでもなく、海の旅は人を親密にするのに都合が良い。小さな帆船の甲板の上で、この2人の若い男女が、波や雲や見え隠れする陸地などの移りゆく光景を眺めながら語っているうちに、単なる面識は温かい友情へと変わり、友情はさらにそれ以上のものになっていった。愛の神キューピッドが、その母親のヴィーナスのようにみずみずしい海の泡から立ち現れて、ドロシーもほとんど気づかぬほど足音も忍びやかに近づいて、彼女の乙女心のなかにそっと入り込

んでしまったのだった。テンブルの心も、それに
 応じる炎で燃え上がった。2人がサン・マロに到
 着したときには、互いの心は深く結ばれていたの
 である。しかしそれは少しも不思議ではない。ド
 ロシーがその魅力のありったけの美しさをあらわ
 にしたら、美しいということのわかる男性がどう
 して抵抗できようか。そしてテンブルの方もまた、
 その美しい容貌は別として、まさしく彼女を惹き
 つけるタイプの男性であったのである。²⁹⁾

ガンジー島の近くに、チャンネル諸島の1つで
 あるハーム (Herm Island) という周囲4マイル (約
 6.4キロメートル) 足らずの小さな島がある。その
 島の沖合を通りかかったとき、一軒の小さな家屋が
 見えた。静かで牧歌的な光景であった。エドワード・
 A・パリが指摘したように、テンブルとドロシーは
 実際その島へ行ったのかもしれない³⁰⁾。数年後、家
 族から結婚を強硬に反対されて精神的に疲れ果てて
 しまったドロシーは、ハーム島の平穏な光景を思い
 出し、世俗的思惑から逃れてその島で2人だけでそ
 っと暮らすことができたらとテンブルに書いた。

「ハーム島とあそこの小さな家のことを覚えてお
 られますか？ あそこへ一緒に参りませんか？ あ
 れほど素晴らしい所はありません。あそこでパウ
 キストピレモンのように生活して、小さな家で一
 緒に歳をとり、難破船の人たちに施しをしたりす
 れば、神の恵みに与って同時に息を引きとること
 ができるかもしれません。まあ、何という無駄話
 をしたことでしょう。こんな話しをするのも、こ
 れは私の気に入りの物語だからです。オヴィディ
 ウスの作品のなかでも、これほど気に入ったもの
 はほかにありません。はじめて読んだとき、泣い
 てしまったのを覚えています。この2人は、敬虔
 な心と愛情だけで成り立つ満ち足りた結婚の極致
 であるように思えるのです。³¹⁾

静かな人生は、ドロシーの若いときからの憧れで
 あった。しかしそうした人生に憧れを抱いたのは、
 ドロシーだけではなくテンブルも同様であった。彼
 は若いとき、もし3つの願いがあって、それらがす
 べてかなうならば何を望むかという問いを友人たち
 としたことがある。テンブルが答えたのは、「健康
 と平和と良い天候」であった。彼自身言うように、
 これは「若者には珍しい願いである。だが老人には
 十分納得できるものかもしれない³²⁾」。テンブルに
 は、早くから洗練された静穏な人生を求める傾向が
 あった。そしてその傾向は、年齢を重ねるにつれて
 強まっていった。もっとも、彼の置かれた環境はそ
 うした生き方を許さず、政治の舞台に引きずり出さ
 れて交渉や駆け引きに翻弄され続けた。時には政治

的裏切りにもあった。もちろん、テンブルには政治
 的野心や権力欲がなかったわけではない。だが彼の
 気質は、基本的には激しさと極端を嫌い、精神的に
 も感覚的にも平穏と安定性を好む傾向にあった。そ
 の点で、テンブルの気質はドロシーのそれと似てい
 た。「いや、あらゆる点でよく似ていた。彼女がこ
 れまでに会ったどの青年たちと比べても、彼の方
 がずば抜けて魅力があり頭も良かったというだけ
 ではない。実務や政治闘争に没頭している人びとの群
 がる集団のなかで、彼女ははじめて自分に似た心の
 持ち主に出会ったのである。自分と同様に、読書、
 田園、親密な友情、そして瞑想に至高の価値を置い
 ている人物にである。³³⁾

ドロシーたちとサン・マロに到着したテンブルは、
 その地に約1カ月間とどまった。おそらくテンブル
 は、ドロシーの父親に会ったものと思われる。サン・
 マロは、フランス北西部のサン・マロ湾に注ぐラン
 ス川河口の右岸に位置し、有名な私掠船「コルセー
 ル」の根城であり、それが持ち帰るブラック・マネー
 によって繁栄を極めたフランス随一の港町である。
 城壁で囲まれた街の中心部は、城やサン・バン
 サン大聖堂や裁判所など豪華な石造りの建物が軒を
 連ねていた。テンブルとドロシーは、それらの古い
 建造物を探索したり、曲がりくねった路地を散歩し
 たり、ヒースで覆われた断崖に打ちつける白波を眺
 めたりして楽しい時間を過ごしたに違いない。だが
 そうした心躍る楽しい時間も、テンブルの父親から
 の手紙によって突然破られる。誰から聞いたのか、
 女友達のできた息子がサン・マロで油を売っている
 ということを知った父親は、本来の旅行目的を果た
 すべく、直ちにパリに向かって出発するよう厳命し
 たのである³⁴⁾。たとえ成年に達していようとも、子
 は親の命令に従うのが当然と考えられていた時代で
 ある。テンブルも父親の命に逆らうことはできなかつ
 た。程なくしてドロシーと別れ、パリへと向かう。

テンブルの父親が激怒して息子に旅行の続行を命
 じたのは、ドロシーとの仲が深まって「秘密の誓約」、
 すなわち結婚の約束へと進まないうちに2人を別れ
 させたいからであった³⁵⁾。そしてそうした考えは、
 実はドロシーの親も同じであった。両家の親が結婚
 に反対した理由としては2つのことが考えられる。
 1つは、両家の政治的立場の違いである。これまで
 しばしば述べてきたように、テンブル家の者はおお
 むね議会派に属し、父親のサー・ジョンは一貫して
 議会を支持していた。他方、オズボーン家は国王派
 の人間が多く、ドロシーの父親のサー・ピーター・
 オズボーンは不屈の精神でチャールズ1世に仕えた
 熱烈な国王支持者であった。2人の息子も王のため

に戦死していた。したがって、同じジェントリ階層に属しながらも、このように政治的立場の異なる家族が姻戚関係を結ぶのは困難であった⁶³。ロミオとジュリエットは、必ずしも物語の世界だけの話しではなかったのである。

しかしながら、両家の親が結婚に反対したのは必ずしも政治的理由からだけではなかった。むしろ両家にとってそれ以上に重要なのは、財産の有無という経済的な問題であった。政治的立場の相違が唯一の問題ではなかったことは、ドロシーがクロムウェルの息子のヘンリ・クロムウェルから求婚されていたことから理解できよう。この申し込みに対し、オズボーン家の者が反対した形跡はない。それゆえ2人の結婚を阻む障害として、政治的イデオロギーの違いをあまりに強調すべきではない。両家の親が最も重要視したのは相手側の財産であった⁶⁴。この時代、結婚は愛よりも金や地位のためにするのが貴族やジェントリの一般的な考えであり、男性の側であれ女性の側であれ、家族の社会的地位や物質的安定性を確保するために、それにかなう財産をもった相手を探すのが通例であった。ローレンス・ストーンも、「結婚は心理的・生理的欲求を満足させるための個人的な結びつきではなかった。それは、家族とその財産の永続化を保証するための制度的工夫であった。したがって、最大の関心は結婚の金銭的利益に向けられた⁶⁵」と述べている。

こうして、貴族やジェントリたちにとって、財産とそれに伴う地位に配慮することは良き縁組みの基準として何よりも重要であった。しかも縁談を取り決める際に主導権を握ったのは、基本的には親であった。たしかにキース・ライトソンも言うように、社会的エリートの子どもであっても、結婚の主導権は全面的に親の手中に握られていたわけではない。親が子どもの意志を無視して縁談を強引に進めたりするのは、社会の最上層にあって必ずしも常に見られたわけではなく、たとえそうであっても子どもは拒否権をもっているのが普通であった⁶⁶。にもかかわらず、裕福な家庭であればあるほど、また家柄が良ければ良いほど、それだけいっそう親の行使する力は大きくなりがちであった。とりわけ長男の場合はその傾向が顕著であった。というのも長子相続制のもとでは、長男が財産の大部分を相続し、それゆえ長男の結婚は家族の将来にとって決定的に重要なことであったからである⁶⁷。そして娘の縁談にあっては、親の決定権はいっそう強いものがあつたのである⁶⁸。

テンブル家からすれば、破産状態にあるオズボーン家との婚姻はありえず、またオズボーン家として

も、決して豊かとは言えないテンブル家の若者を娘婿として受け入れることはできなかった。2人のつかの間の幸福な時間は、かくして破られた。やっと20歳になったばかりのテンブルには、親の命令を拒むことができるほどの経済的裏付けはなかった。ドロシーとの別れの辛さは推測するよりほかにないが、彼女との仲を引き裂かれたテンブルは、旅先のパリで短い恋愛物語を書いている。そのなかに、子どもを有無を言わせず服従させ、子を不幸にする親の絶対的権力に対する怒りを含んだ一文を見出すことができる⁶⁹。このときのテンブルの悲しい体験を踏まえて書かれたものと言ってよいであろう。他方でテンブルと別れさせられたドロシーも、厳しい現実直面して元気を失っていた。1649年に父親とともにチックサンズに帰郷したドロシーは、将来への展望が見えず、快活さや晴朗さをなくしてしまった心の状態をテンブルにこう伝えている。「私はイングランドの大半の若い人たちと同じように、ユーモアを解する人間だと思われていました。怒りを覚えることも、心を乱すこともありませんでした。でもフランスから帰ってきたとき、誰も私だとは気づきませんでした。それほど私は変わってしまったのです。浮かれすぎることなく、いつも楽しくしていた明るい性格は変わり、沈み込んでろくに口もきかない、心を乱したひねくれ者になってしまいました。気候に特徴的な陽気さと快活さを人びとに与えているあの国〔フランス〕が、私にはまったく逆の効果をもたらし、〔チックサンズの〕人びとにとって私は別人のようになってしまったのです⁷⁰」。

5. チックサンズのドロシー

さて、1648年の夏頃にテンブルと別れたドロシーは、父親や兄のロバートたちとサン・マロにとどまったが、オズボーン家はチックサンズに戻ることに期待をかけていた。第1次内乱が激しさを増した43年3月、「ハンティンドンやベッドフォードやその他の州にあるサー・ピーター・オズボーンの地所および彼の官職は差し押さえられ、コモンウェルスに役立つよう用いられるべきである⁷¹」と議会で決議されていた。そしてもし議会派と妥協しなければ、チックサンズの所領を永久に没収すると通告されていた。

第2次内乱が終結して約1カ月後の1648年9月、ワイト島のニューポートで長老派とチャールズ1世との間で和平交渉が行われた。国王派はこの交渉に望みをかけていた。しかしそうした期待も国王の優柔不断な態度によって裏切られ、サー・ピーターも味方が敗北していくのを対岸のサン・マロからただ

眺めるしかなかった。オズボーン家はいよいよ窮地に追いやられた。49年1月30日にチャールズ1世が処刑されると、もはやなすすべもなかった。差し押さえられたチックサンズの所領が売却されることになったと聞いたサー・ピーターは、ハーグに亡命中のチャールズ2世に王室への忠誠心は微動だにしないものの、事ここに至れば降参するほかないと認める手紙を書いた⁴⁹。不屈の国王派であったサー・ピーターも、家族を守るためにはプライドを捨てて議会派に従うしか残された道はなかったのである。彼はチックサンズで暮らす権利を得るために、示談による差し押さえ解除という、いわゆる「示談制度」に基づいて10,000ポンドの示談金 (composition) を議会派に支払った⁵⁰。そして49年の夏にチックサンズに戻った。

こうして、財産はほとんど底をついた状態になったにもかかわらず、オズボーン一家は曲がりなりに故郷で暮らすことができるようになった。しかしチックサンズに戻っても過酷な運命は変わらなかった。帰郷して1年ほどのちに、度重なる苦勞から心身の衰えていたドロシーの母親が60歳で死去したのである。父親のサー・ピーターも老齢の身であった。しかも彼の健康も日を追って衰え、やがてベッドに臥せる日々となった。父親の世話と家政はドロシーに委ねられた。チックサンズでの生活は単調で暗澹たるものであった。だがそうした生活のなかでも、ドロシーには自らの内面を見つめていくだけの冷静さがあった。彼女は父親の世話をしながら折々に感じたことや考えたことを、また身の回りで起こった日々の出来事を豊かな感性と鋭い観察眼でもって書き綴った。

イギリスはよく女流作家の国と言われる。だがそれは18世紀半ば以降のことであって⁵¹、ドロシーの時代は女性が本を出版するのはもちろん、ものを書くことさえ白い目で見られるのが普通であった。1610年代に、「著述は男の特権の一部だ⁵²」と詩人のサー・トマス・オーヴァベリは断言していたし、聖職者のダニエル・トゥヴィルも、親たる者は「娘がペンでものを書くのを善悪の木として禁止すべきだ⁵³」と忠告していた。女性は敬虔で、しかも慎み深くしとやかで、男性の庇護のもとに従順に生きるのが幸せな生き方であると考えられていた時代である。女性が才気走って男勝りにものを書き、それを世間に公表することなど許されるものではなかった。従来伝統的な教育を受けていたドロシーも、基本的にはこのような考え方をしていた。1653年に個性的な性格で知られたニューカスル公爵夫人が『詩と空想』(Poems and Fancies, 1653)を出版した

とき、ドロシーはテンブルに宛ててこう書いた。「お気の毒に、このご婦人は少し気が触れていらっしゃるわ。そうでなければ本を、それも韻文で書こうとするほど馬鹿なことをなさるはずはありません。私でしたら、たとえ2週間眠れなくても、そのようなことは絶対しないでしょうに⁵⁴」。

しかし、手紙ならば女性でも書くことができた。否、女性に許されたのは手紙ぐらいであり、むしろ女性の活躍の場ですらあった。というのは、手紙のやりとりは教養ある女性のたしなみであると同時に、変化の乏しい生活に刺激を与え、心を慰め楽しませる娯楽の役割をも果たしていたからである。さらにドロシーの時代は、女性が手紙を書く社会的背景があった。けだしローレンス・ストーンも言うように、内乱によって多くの家族が引き裂かれたが、ばらばらになった家族を結びつけていた唯一の頼みの綱が手紙であり、手紙を通して家族を1つにまとめる役割を担ったのが主として女性であったのである⁵⁵。かくしてドロシーも手紙をしたためる。その名宛人が、仲を引き裂かれた恋人のテンブルであったことは言うまでもない。ヴァージニア・ウルフは、ドロシーの手紙を次のように評している。いささか長いが引用しておこう。

「ドロシー・オズボーンが、もし1827年に生まれていたらきっと小説を書いていたことだろう。1527年に生まれていたら、決して何も書き残しはしなかっただろう。しかし、彼女が生まれたのは1627年だった。当時、女性が本を書くのは愚かなことであったが、手紙を書くのは少しも不適切ではなかった。こうして少しずつ沈黙が破られていく。私たちは灌木の茂みのつぶやきを耳にし始め、イギリス文学史上はじめて男と女が暖炉を囲んで語り合う言葉を聞く。／……手紙を書く技は、……女性が女らしさを失わずに発揮できる技であった。こま切れの時間に、父親の病床の傍らで数限りない中断の合間を縫って続けることが可能で、はらはらさせるような意見を述べることもなければ、書き手はいわば匿名に等しく、しばしば表向きは何かしら有用な目的のために書く口実をもった技だった。それでも、今や大部分は失われてしまったが、このおびただしい手紙のなかに、のちになって『エヴェリーナ』や『高慢と偏見』のなかになりに異なった形で現れることになる観察力や機知が注がれていた。ただの手紙なのに、ある種の誇りがそこに注ぎ込まれていた。……私たちは、もしドロシー・オズボーンがそう呼ぶことを許してくれるなら、文学の1つの形式に出会う。それは他のものとは明確に異なる文学形式で、

私たちの手からおそらく永遠に消えてしまった今、非常に惜まれるものである。／というのもドロシー・オズボーンは、父親のベッドの傍らや炉辺で膨大な数の手紙を書きながら、1人の読者に向けて、しかもいささか気難しい人間にとてもきまじめに、だが茶目っ気を發揮して、また儀礼的だがある親しみも込めて、小説家にも歴史家にもできないような方法で人生の記録を残したからである。⁽⁴⁾」

ドロシーのテンブル宛書簡は、テンブルとの仲を裂かれた1648年の夏頃から書き始められたと思われる。ドロシーは頻繁にしたため、テンブルもまたそれに返信した。結婚に反対された2人が、周囲の状況に翻弄され、時には心をなえさせながらも、互いの気持ちを文字に綴って最終的に結婚への意志を確認し合っていく、まさにその伝達者となったのが手紙であった。その点で2人にとって手紙は、サミュエル・リチャードソンの表現を用いるならば、まさしく「友情の接着剤」であり、「〔ペンを持った〕手と〔手紙の〕封印のもとで誓い合った友情⁽⁵⁾」そのものにほかならなかった。もっとも、多くの手紙は失われ、現存するのはテンブルのものがわずか1通と、1652年のクリスマス・イヴから54年の結婚少し前までに書かれたドロシーのものが77通である。しかしわれわれは、その77通のなかに多くのことを読み取ることができる。またそれらは、テンブルの人間形成や思想形成に少なからぬ影響を及ぼしたように思われる。稿を改めてその意義を考察しよう。

- (1) グランド・ツアーに出かけるまでのテンブルについては、拙稿「教養形成期のウィリアム・テンブル」(『岡山大学法学会雑誌』第62巻第1号, 2012年) 1-32頁を参照していただきたい。
- (2) Martha Giffard, "Life and Character of Sir William Temple," in *Early Essays and Romances of Sir William Temple Bt., with the Life and Character of Sir William Temple by His Sister Lady Giffard*, ed. G. C. Moore Smith (Oxford: Clarendon Press, 1930), p.5.
- (3) *Ibid.*, p. xiv. このときはまだ誕生していないが、ディングリの孫にレベッカ・ディングリという女性がいる。長じてテンブル家に住み込みで入り、テンブルの妹のジファード夫人の使用人となった。彼女は、テンブルよりむしろ彼の庇護を受けたジョナサン・スウィフトと大きく関わる人物である。すなわち、レベッカはスウィフトの永遠の女性であるステラことエスター・ジョンソン――

彼女もテンブル家に世話になっていた――のコンパニオン役を生涯にわたって務め、テンブルの死後程なくしてスウィフトに呼ばれてステラとともにアイルランドへ渡り、スウィフトの金銭的援助を受けながらステラに影のように寄り添って生きた女性である。彼女はステラが死んで15年後、スウィフトが死ぬ2年前に77歳で他界している。

- (4) ロバート・ハモンドについては、以下の文献を参照。Edmund Ludlow, *Memoirs of Edmund Ludlow Esq; Lieutenant-General of the Horse, Commander in Chief of the Forces in Ireland, ...* 2nd edn., 3 vols. (London, 1720-22), I; Robert Hammond, *Letters between Col. Robert Hammond, Governor of the Isle of Wight, and the Committee of Lords and Commons at Derby-House, General Fairfax, Lieut. General Cromwell, Commissary General Ireton, &c.* (London, 1764); Thomas Herbert, *Memoirs of the Two Last Years of the Reign of King Charles I* (London, 1815); John Ashburnham, *A Narrative by John Ashburnham of His Attendance on King Charles the First from Oxford to the Scotch Army, and from Hampton-Court to the Isle of Wight*, 2 vols. (London, 1830); Henry Cary (ed.), *Memorials of the Great Civil War in England from 1646 to 1652*, 2 vols. (London, 1842).
- (5) Moore Smith (ed.), *Early Essays and Romances*, p. 201, n. 55.
- (6) ドロシーの曾祖父であるサー・ピーター・オズボーンは、エドワード6世のチューターをしていたサー・ジョン・チークとバーリ卿ウィリアム・セシルと親しく、彼らの影響力によってエドワード6世の手許金會計吏 (Keeper of the Privy Purse) となり、その後、財務府大蔵卿付き収入管理官の官職を得た。このサー・ピーターの長男が、ドロシーの祖父のサー・ジョン・オズボーンである。サー・ジョンは庶民院議員を25年間務め、父親のサー・ピーターから大蔵卿付き収入管理官のポストを相続した。1618年にはナイトの称号が与えられている。サー・ピーターとサー・ジョンについては、*Oxford Dictionary of National Biography*, s. v. "Osborne, Peter"; William C. Grayson, *Chicksands: A Millennium of History* (Crofton, Maryland: Shefford Press, 1994), pp. 34-36; Introduction to *Dorothy Osborne: Letters to Sir William Temple, 1652-54. Observations on Love, Literature, Politics and Religion*, ed. Kenneth Parker (Aldershot: Ashgate, 2002), p.6を参照。
- (7) チックサンズの屋敷は、元は1150年頃にギルバート修道会 (Gilbertines) によって建てられた男

- 女混合修道院であった。16世紀の修道院解散 (Dissolution of the Monasteries) 後、1576年にドロシーの曾祖父が購入、その後約400年間あまり、第2次世界大戦前に国に売却されて英国空軍の施設となるまでオズボーン家の居宅であった。その後、建物は軍事施設として、また地所は空軍基地として1995年までアメリカ空軍が使用した。チックサンズの歴史については、Grayson, *Chicksands*が最も詳しい。Jane Dunn, *Read My Heart: A Love Story in the Age of Revolution* (London: Harper Press, 2008), pp. 26-27; Introduction to *Dorothy's Letters*, ed. Parker, pp. 47-48, n. 5も参照。
- (8)拙稿「サー・ウィリアム・テンブルとヘンリ・ハモンド」(『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第145号, 2010年) 31-37頁を参照していただきたい。
- (9)*Oxford Dictionary of National Biography*, s. v. "Danvers, Sir Charles".
- (10)*Oxford Dictionary of National Biography*, s. v. "Danvers, Henry, Earl of Danby"; Dunn, *Read My Heart*, pp. 23-24; ジョン・プレスト／加藤暁子訳『エデンの園——楽園の再現と植物園』(八坂書房, 1999年) 10-14, 78-79頁。
- (11)John Aubrey, *The Natural History of Wiltshire: Written between 1656 and 1691*, ed. John Britton (London: Printed by J. B. Nichols and Son, 1847), p.93. ダンヴァーズの庭園については、John Dixon Hunt, *Garden and Grove: The Italian Renaissance Garden in the English Imagination, 1600-1750* (London: J. M. Dent & Sons, 1986), pp.126-30; ロイ・ストロング／圓月勝博・桑木野幸司訳『イングランドのルネサンス庭園』(ありな書房, 2003年) 343-53頁。
- (12)Francis Bacon, *Essays*, intro. Michael J. Hawkins (London: J. M. Dent & Sons, 1972), p.137 (渡辺義雄訳『ベーコン随想集』岩波書店, 1984年, 200頁)。
- (13)Dorothy Osborne to William Temple (5 or 6 March 1653), Letter 10, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p.76.
- (14)Grayson, *Chicksands*, p.38.
- (15)Dorothy Osborne to William Temple (16 Sept.1654), Letter 75, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p.213.
- (16)コーネット城の歴史については、B. H. St. J. O'Neil, *The History of Castle Cornet, Guernsey* (Guernsey: State of Guernsey Ancient Monuments Committee, 1981)を参照。
- (17)Ferdinand Brock Tupper, *The History of Guernsey and Its Bailiwick; with Occasional Notices of Jersey* (Guernsey, 1854), pp.226-27; idem, *The Chronicles of Castle Cornet, Guernsey, with Details of Its Nine Years' Siege during the Civil War, and Frequent Notices of the Channel Islands* (Rarebooksclub.com, 2012), p.27.
- (18)Introduction to *Dorothy's Letters*, ed. Moore Smith, p. xiv.
- (19)*Ibid.*
- (20)Tupper, *Chronicles of Castle Cornet*, p.72; Grayson, *Chicksands*, p.42.
- (21)Dunn, *Read My Heart*, p.46.
- (22)本城靖久『グラント・ツアー——良き時代の良き旅』(中央公論社, 1983年)は、当時の旅行の様子を生き生きと描いている。
- (23)Martha Giffard, "Life and Character of Sir William Temple," in *Early Essays and Romances*, ed. Moore Smith, p.5.
- (24)*Ibid.*
- (25)*Ibid.*, pp.5-6.
- (26)David Cecil, *Two Quiet Lives* (London: Constable & Co., 1948), p.15 (宮下忠二訳『二つの静かな人生』八潮出版社, 1981年, 20-21頁)。
- (27)*The Letters from Dorothy Osborne to Sir William Temple*, ed. Edward A. Parry (1914: rpt, London: J. M. Dent & Sons; New York: E. P. Dutton & Co., 1932), p.194.
- (28)Dorothy Osborne to William Temple (14 Jan. 1654), Letter 54, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p.168. ドロシーが感銘を受けたのは、オヴィディウスの『変身物語』(*Metamorphoses*) 巻8の「ピレモンとバウキス」物語である。
- ある日、ユピテル大神とその子メルクリウス神が人間に姿を変えてプリュギアへやって来た。憩うべき宿を求めて多くの家々を訪ねたが、すべての家が固く門を閉ざした。しかし、敬虔で貧しい老夫婦のピレモンとバウキスだけは、神であることを知らずに彼らを温かく迎え入れ、精一杯のもてなしをした。2人の親切に感銘を受けた神々は、それに報いるべく老夫婦の古いあばら屋を立派な神殿に変えた。そしてほかに望むものはないかと2人に尋ねた。『心正しい老人よ！心正しい夫にふさわしい妻よ！望みのことを言うがよい』。ピレモンはしばらくバウキスと話し合ったあと、共通の決心を神々に知らせた。『私どもは神官となり、あなた方の神殿を守りとうございま

す。そして、2人が心を1つにして長の年月を過ごしてきたのですから、2人同時に死にとうございませう。妻の葬いを見たくはありませんし、妻の手で埋葬されたくもないのです』。この願いはかなえられた。2人は生きているかぎり神殿の番をした。古い衰えた2人がたまたま神殿の階の前に立って土地の昔話をしていたとき、バウキスがふと見ると、ピレモンの身体から木の葉が出始めていた。老ピレモンの側からしても、バウキスが葉をつけていくのがわかった。すでに梢が2人の顔を越えて伸びていたが、できる間は言葉を交わし合った。そして『さようなら、妻よ!』『さようなら、夫よ!』と言い合ったと同時に、群葉の茂みが彼らの口を覆い隠した(オヴィディウス/中村善也訳『変身物語(上)』岩波書店、1981年、340-41頁)。

(29) William Temple, *Of Health and Long Life*, in *The Works of Sir William Temple, Bart*, 4 vols. (London: Printed for J. Brotherton and Others, 1770), III, p.268.

(30) Cecil, *Two Quiet Lives*, p.18 (邦訳、24-25頁)。

(31) Martha Giffard, "Life and Character of Sir William Temple," in *Early Essays and Romances*, ed. Moore Smith, p.6.

(32) 当時、親の承諾前に2人だけで婚約するのまだけではなかった。Sara Heller Mendelson, "Debate: The Weightiest Business: Marriage in an Upper-Gentry Family in Seventeenth-Century England," *Past and Present*, 85 (1979), 131.

(33) Dunn, *Read My Heart*, p.xviii.

(34) Introduction to *Dorothy's Letters*, ed. Parker, pp.6-7; Carrie Hintz, *An Audience of One: Dorothy Osborne's Letters to Sir William Temple, 1652-1654* (Toronto: University of Toronto Press, 2005), p.5.

(35) Lawrence Stone, *The Crisis of the Aristocracy, 1558-1641*, abr. edn. (Oxford: Oxford University Press, 1967), p.280.ストーンは、ヨーロッパ家族史研究の基本文献とも言うべき『家族・性・結婚の社会史』で、結婚の動機として4つの選択肢を挙げている。そのうち「第1の、そして最も伝統的な結婚の動機は、家族の経済的・社会的・政治的な強化ないし拡張である。これらが目的となっている場合、結婚は第一義的には結婚する2人にとってというよりは、その両親や親族にとっての具体的な恩恵の交換をめぐって両家の間で交わされる契約である。——これは、同時代人によって『利益』という単一の項目に包括される考慮すべき動機であった」と述べている。Lawrence Stone, *The*

Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800, abr. edn. (Harmondsworth: Penguin Books, 1990), p.182 (北本正章訳『家族・性・結婚の社会史——1500年-1800年のイギリス』勁草書房、1991年、224頁)。

(36) キース・ライトソン/中野忠訳『イギリス社会史——1580-1680』(リプロポート、1991年) 115, 125頁。

(37) Stone, *Family, Sex and Marriage in England*, p.182 (邦訳、223-24頁)。

(38) 上流階層にあつては、女性の縁談が男性以上に親の主導下にあつたことは18世紀に入つても基本的に変わらなかつた。そのことは、当時の文書からも明らかである。「親が取り決める結婚は、一般的に(身分の高い人びとや大きな財産を有する人びとの間では)スミスフィールドでの取り引きと同じようなものである。娘は、土地いくらに対して現金いくらというように取り引きされる。……概して親というものは(少なくとも金持ちや高貴な人びとの間では)、子どもたちの気持ちを聞くことも、結婚における子どもたちの真の幸福について考えることもなく、もっぱら財産を手に入れようとしているだけである」(Hester Chapone, *The Posthumous Works of Mrs. Chapone*, 2 vols. [Edinburgh, 1807], II, pp.121-23)。「財産と家族のことを指図するのは、もっぱらあなた方の父親の務めです。父親が、たとえ無理強いすることはできなくても、反対する明白な権利を常にもっていることは間違いありません。娘としては、気持ちの進まない縁談の場合、たとえ父親の絶対的な命令であっても、その縁談を断るのは大いに正当化できることですが、父親の賛成なしに結婚の約束をするのは極度に非難されるべきことなのです」(Sarah Pennington, *An Unfortunate Mother's Advice to Her Absent Daughters, in a Letter to Miss Pennington*, in *The Young Lady's Parental Monitor* [London, 1792], p.89)。

(39) William Temple, "A True Romance or the Disastrous Chances of Love and Fortune," in *Early Essays and Romances*, ed. Moore Smith, p.115.

(40) Dorothy Osborne to William Temple (4 or 5 Feb. 1654), Letter 57, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p.175.

(41) *The Journals of the House of Commons* (21 March 1643), III, p.11.

(42) Tupper, *Chronicles of Castle Cornet*, pp.83-84.

(43) 一時金を支払うことによって差し押さえを解除するという示談制度は1644年9月13日に成立してい

るが、この示談条例については、浜林正夫『イギリス市民革命史』増補版（未来社，1971年）218頁を参照。

- (44) サミュエル・ジョンソンは、多くの者がペンを執った18世紀中葉のイギリスを「作家の時代」(Age of Authors)と呼んでいる。そしてとりわけ女流作家が増えたことを強調して、「今やペンを手にしたアマゾンの世代が生み出されている」と皮肉っぽく述べている。ジョンソンの表現にはいささか誇張が混じっているとはいえ、時代の推移とともに女性作家が増大したことは間違いない。ちなみに、ジョンソンがこう書いたのは1753年であった。*The Adventurer*, no.115 (11 Dec. 1753), 4 vols. (London, 1754), IV, pp.77-78. なお、18世紀後半以降の女性作家の増加については、Judith Phillips Stanton, “Statistical Profile of Women Writing in English from 1660 to 1800,” in *Eighteenth-Century Women and the Arts*, ed. Frederick M. Keener and Susan E. Lorsch (New York: Greenwood Press, 1988), pp.247-54; Cheryl Turner, *Living by the Pen: Women Writers in the Eighteenth Century* (London: Routledge, 1992)を参照。
- (45) Thomas Overbury, “A Wife,” in *The Miscellaneous*

Works in Prose and Verse of Sir Thomas Overbury, Knt., ed. Edward F. Rimbault (London: John Russell Smith, 1856), p.41.

- (46) Daniel Tuvil, *Asylum Veneris, or A Sanctuary for Ladies*, in Angeline Goreau, *The Whole Duty of a Woman: Female Writers in Seventeenth-Century England* (New York: The Dial Press, 1985), p.35.
- (47) Dorothy Osborne to William Temple (14 April 1653), Letter 17, in *Dorothy's Letters*, ed. Parker, p.89.
- (48) Stone, *Family, Sex and Marriage in England*, p.156 (邦訳, 185頁).
- (49) Virginia Woolf, *The Common Reader*, ed. Andrew McNeillie, 2 vols. (London: Vintage, 2003), II, pp.60-61 (出淵敬子・川本静子監訳『女性にとっての職業——エッセイ集』みすず書房, 1994年, 92-94頁).
- (50) Samuel Richardson to Sophia Westcomb, in *The Correspondence of Samuel Richardson, Author of Pamela, Clarissa, and Sir Charles Grandison*, ed. Anna L. Barbauld, 6 vols. (1804; rpt. New York: AMS Press, 1966), III, p.245.

